橘叢書第十三

句集

砂時計

山口風樹

邑心文庫

著者略歴

山口又一（やまぐちまたいち）　俳号　風樹

昭和８年11月５日　埼玉県吹上町に生る。

昭和57年「橘俳句会」に入会

現在「あかつき会」会員　「橘」同人

株式会社　角屋酒食料品店代表取締役

現住所　埼玉県北足立郡吹上町本町４－５－11　〒369-01

ＴＥＬ　0485－48－0058

句集「砂時計」橘叢書第十三

昭和六十一年十月一日　印刷
昭和六十一年十月一日　発行

著　者　山口又一

発行者　山口又一

印　刷　㈱会議録センター

発行所　邑心文庫
吹上町本町一―四―十二
電話　〇四八五（四八）〇六〇九

製本所　壽精版印刷株式会社

序

松本　旭

天皇誕生日、海抜千メートルの上州伊香保の出湯は、桜の花があふれ咲く。遙か左手前方に谷川岳をはじめ越後境の山々が雪をいだいてうねりつづく。つばくらめが宿の庭先の潦に群がり来る。それこそ何十羽という数だ。かたまるようにしてやがてパッと空へ舞いあがる。この大自然のいとなみの中に、人々はおのもおのも生きつづける。その生きつづけることの意義と尊さを思う。ここ、「仁泉亭千明」の二階の一室で山口風樹さんの句集、句稿を開いていくと、その明るい人間性のゆたかさ、その生きざまがおのずと伝わってくるから楽しい。

風樹さんは昭和八年生まれの五十二歳、まさに働きざかりの齢だ。毎日が忙しい。家業は酒屋。絵を自ら画き、焼物に惹かれ、仏教美術に興味を示す。しかも吹上町の文化財保護委員をつとめ、町商工会の副会長として、ロータリー・クラブの幹事役として、大童な

活躍をしている。酒屋の家業を継いだのは、兄さん達が戦死をしたり早逝したりのため、また父親の隣三さんが高齢のためであった。教師になる夢を捨てての決意であった。その心構えと意気ごみとからは、その家業に精を出す日々である。

句集『砂時計』には、その家業を継ぎ営むことの生活が太く描かれる。忙しくとも日々充実しているのである。次のような句々がある。

前掛の紺固くしめ年明くる
酒売りし元日の夜は吾も酔ひ
青東風や酒注文の電話鳴り
酒売りて私小説めく春の暮
青芝に配達袋切れて落つ
も一度の外売りに出て春暮るる
帳尻の合うて沈丁花の中に
牡丹のふくらむを見て配達す
苔の花五男と生まれ店を継ぐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中元の客をさばきて明日は旅

酒売るや短日の鼻赤らめて

商人の四肢の疲れに秋暑せり

寒の雨指太らせて酒を売る

極月の三代目なる店を守る

酒売りし手を遊ばせて冬至風呂

清明の酒棚に酒満たしけり

時には前掛をしめて酒を配達したり、外売り出たりする。日々忙しい。忙しいがそれにへこたれない。却ってそこに生活の充実感をいだいているのだ。その生活を詠みあげる。その力強い心の張りは、時には「牡丹のふくらむを見て配達す」のような美しい句が生まれ、「酒売りし手を遊ばせて冬至風呂」と、一日が終るとほっと心の安らぎを得る。もちろん時には家を離れて旅をしたい。それを無性に強くのぞむことがあろう。

草の絮旅の一人となりたくて

旅癖は他人のこととし芝枯るる

と詠む。しかしまた気を取りなおし今の家業充実への日々に満足と生き甲斐とを見出していくのだ。

次のような作品がある。

施餓鬼会に混りしただの男たり
もの想ふみかんを頬に当ててゐて
わがあとをつきくる刈田わがあとを
凍雲や四十の腕を組みほどく
冬帽子大きく被り口ずさむ
吾のみの聞ゆる音ぞ冬霞
バッハ聞く外套の襟立てしまま

これらの句には、己を凝視する目がある。ある日ある時の己の生き方・生きざまをじっとみている姿勢がある。かつてわたくしは「橘」の「晨風鑽言—今月の秀句」の中で、

「冬帽子」の句を次のように評した。

冬帽子を被った折りのおのれを、おのれで確認した作品。そこにひとり言的に何かを口ずさんでいる自分を見出しているのである。冬帽子をかむった作者の後ろには、大枯野が、せわしない街があるかも知れない。商売の関係で、どこかの店か家を訪ねた時の情景かも知れない。そのバックにあるすべてのものを消去して、自分自身のみを描いた。いわゆる〃感動の焦点化〃が利いた作品。「大きく被り」の「大きく」も効果を挙げている。

ひとりの境涯で真の秀句は数句を産み出せば立派と言われるが、集中充実した作品をいくつか挙げれば

砂時計まさしく落つる五月かな

痛きまで髪を洗へば蜘蛛垂るる

燭のみのひろがりに月祀りけり

芦の花またいくばくの歩を返す

白萩の吹かるるにあらず揺れてをり

等がある。「白萩の」のごときは、その自然物たる「白萩」をじっと見つめ、その揺れるさまをとらえて白萩の生命（いのち）を写しえたといえる作品と言えよう。すなわちその受身的な行動から主体的な行動としての白萩のいのちの動きを把握しえた。作者の心境の深さを感じずにはおられない。

こういった心の深まりは、忙しい家業の中にも、絵を画くことをなし、古壺の在りざまへの関心を強め、仏像に心を寄せる心の充実とその深まりとがもたらすものと言ってよい。

最近の句境の進展はまことにすばらしい。おのれの生活と人生の在り様を自覚し得た者のもつ透徹した目なざしが感じられるのだ。

少年の顔となりをり天の川

この句には、天地自然と一如となった風樹さんの真率なる人間像が描かれる。

今後、吹上の街でのひとりの俳人のたくましい生き方がどう描かれていくのであろうか。まぶしいほどの発展が期待され、頼もしい限りである。

昭和六十一年四月二十九日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

序　松本旭……1
新年……13
春……19
夏……55
秋……101
冬……139
昭和60年以降……183
あとがき　山口風樹……219

句集

砂時計

新年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co